

[0017]九州大学生体防御医学研究所年報 : 2002年

<https://doi.org/10.15017/6249>

出版情報 : 九州大学生体防御医学研究所年報. 17, 2003-07. 九州大学生体防御医学研究所
バージョン :
権利関係 :

生 体 防 御 医 学 研 究 所 附 属 病 院
H o s p i t a l

診療放射線室

Radiology

医師 2 名、放射線技師 4 名で、画像診断全般、IVR、放射線治療を担当している。

研究では、MRI を用いてステロイドミオパチーを早期に発見し、その程度を客観的に評価できるパラメーターの開発を目指している。また、放射線防護剤の新たな投与法の開発に関する研究にも着手した。

A.ステロイドミオパチーの客観的指標としての T2 緩和時間、Magnetization Transfer Ratio(MTR)の有用性

ウサギにステロイドを投与し、その前後での T2 緩和時間、MTR の変化と、凍結切片での筋線維萎縮の程度との相関を調べている。プレリミナリーではあるが、有意な相関が認められており、今後、症例数を増やしていく予定である。

B.放射線防護剤の新たな投与法の開発

放射線防護剤に関する研究は現在まで多数行われてきたが、従来の全身投与法では安全域が狭く臨床応用は困難であった。我々は実験動物を用いて、IVR 手技を応用したより安全な局所投与法の開発を行っている。

業績目録

原著論文

1. Sakamoto, A., Oda, Y., Adachi, T., Saito, T., Tamiya, S., Iwamoto, Y., and Tsuneyoshi, M. 2002.
Beta-catenin accumulation and gene mutation in exon 3 in dedifferentiated liposarcoma and malignant fibrous histiocytoma.
Arch. Pathol. Lab. Med. 126, 1071-1078.
2. Adachi, T., Oda, Y., Sakamoto, A., Saito, T., Tamiya, S., Hachitanda, Y., Masuda, S., and Tsuneyoshi, M. 2003.
Mixed tumor of deep soft tissue.
Pathol. Int. 53, 35-39.
3. Adachi, T., Oda, Y., Sakamoto, A., Terashi, T., Tamiya, S., Hachitanda, Y., and Tsuneyoshi, M. 2003.
Prognostic factors in so-called malignant mesenchymoma: A clinicopathological and immunohistochemical analysis of 12 cases.
Oncol. Rep. (in press).
4. Hatakenaka, M., Adachi, T., Matsuyama, A., Mori, M., and Yoshikawa, Y.
Xanthogranulomatous cholecystitis: importance of chemical-shift gradient-echo MR imaging.
Eur Radiology. (in press).

附属病院検査部

Diagnostic Laboratory

常勤技師 6 名，非常勤技師 2 名，および教官 1 名で業務に当たっている。1 名の技師の辞職に伴い平成 14 年 8 月公募により宇藤満昭を採用した。検査項目の見直しは毎年のように行っているが大きな業務の変更はない。平成 13 年度より行っている九大医学部附属病院検査部との間で技師の人事交流は，2 年目となった。

先進医療総合診断システムにより，大型自動分析機器数点と検査部内部のコンピュータシステムが導入され，10 月 1 日稼働を開始した。

業績目録

原著論文

1. Masuda, T. Inoue, H. Sonoda, H. Mine, S. Yoshikawa, Y. Nakayama, K. Nakayama, K. Mori, M. 2002.
Clinical and biological significance of S-phase kinase-associated protein 2 (Skip 2) gene expression in gastric carcinoma: Modulation of malignant phenotype by Skip2 overexpression, possibly via p27 proteolysis.
Cancer Res 62, 3819-3825.
2. 吉河康二，山下勉，那須眞二 2002.
健常人に孤発したクリプトスポリジウム症の 1 例.
胃と腸 37 (3): 481-486.
3. 鈴木康代，吉河康二，前田豊樹，岡田全司，鈴木友和 2002.
アスペルギルスによる頭蓋内動脈炎の 1 剖検例.
大分県医学会雑誌 20 (1) : 32-35.
4. 松田貴雄，吉河康二，浦田啓司郎，宮原英二 2002.
Duchenne 型筋ジストロフィーの出生前診断を行った 2 症例.
大分県医学会雑誌 20 (1) :36-39.
5. 吉河康二 2002.
臨床検査：私の選んだキーワード (病理組織学領域).
メディカルテクノロジー 30(12):1384-1385.
6. 吉河康二 2002.
図説：乳癌における HER-2 免疫染色.
大分県医学会雑誌 21 (1):1-2.
7. 松田貴雄，吉河康二，西内伸輔，森田哲夫，大川欣栄 2002.
胎児が Y 過剰男性と出生前診断された妊婦への遺伝カウンセリング.
大分県医学会雑誌 21 (1):22-26.
8. Shinji Satoh, Uasuko Uede, Masamichi Koyanagi, Toshiaki Kdokami, Masahiro Sugano, Yasuji Yoshikawa, Naoki Makino 2003.

Chronic inhibition of Rho kinase blunts the process of left ventricular hypertrophy leading to cardiac contractile dysfunction in hypertension-induced heart failure

J Mol Cell Cardiol 35: 59-70.

9. 小松由明, 吉河康二 2002.

子宮頸部病変の完全切除後も細胞診異常が持続する症例の検討
日本臨床細胞学会大分県支部会誌 13 : 11-13.

学会発表

1. 坂本理笑子, 牟田浩美, 小寺隆元, 千住猛士, 松坂浩史, 板場壮一, 前田豊樹, 千々岩芳春, 谷憲三郎, 吉河康二, 生山祥一郎, 畠中正光 (2002, 5/25).

特徴的画像所見を呈した結核性腹膜炎の1例.
第257回日本内科学会九州地方会.北九州市.

2. 竹中朋祐, 三森浩士, 相良安昭, 岡本正博, 増野浩二郎, 白石猛, 田中文明, 岸原文明, 宇都宮徹, 井上裕, 吉河康二, 森正樹 (2002, 10/5).

回腸異所性膵組織を先進部として腸重積を来した1例.
大分県外科医会.大分市.

3. 吉河康二, 松田貴雄, 利光美代 (2002, 10/20).

当院における遺伝カウンセリングの実践.
第65回大分県医学会.大分市.

4. 松田貴雄, 吉河康二 (2002, 10/19).

多型を用いたドゥシェンヌ型筋ジストロフィーの出生前診断.
第9回 日本遺伝子診療学会大会.京都市.

5. 松田貴雄, 吉河康二(2002, 11/2).

シンポジウム「着床前診断：技術と倫理」 3 「遺伝子診断の技術の進歩に伴って生じる着床前診断」における倫理的な問題」ードゥシェンヌ型筋ジストロフィー (DMD) を例に.
出生前診断研究会.鹿児島市.

6. 松田貴雄, 吉河康二, 利光美代(2002, 11/14).

ドゥシェンヌ型筋ジストロフィーの出生前診断の際の臨床上的問題点.
第47回 日本人類遺伝学会総会.名古屋市.

7. 松田貴雄, 吉河康二(2003, 2/22).

ドゥシェンヌ型筋ジストロフィー (DMD) の出生前遺伝子診断.
別府市医師会会員による学術講演会.別府市.

8. 松田貴雄, 吉河康二, 利光美代 (2003, 2/14).

多型を利用した変異アリル同定による保因者診断の実例ー血友病、筋ジストロフィー を例にして.
第4回遺伝子診療ポータルカンファレンス.大分市.

手術部

Department of Operation Center

平成6年より専任教官を置き、研究所附属病院における手術症例の周術期管理を行っている。さらに、病院内での危機管理の一貫として新人医療職員への救急蘇生講習なども実施している。

手術症例は、年間400余りであるが、高齢者、合併症のある方が多い。小さい病院の宿命である、人的力不足になんとか対処している現状である。

研究としては、当初は麻酔法による手術症例の周術期血中サイトカインの変動を調べた。平成11年よりは、急性期生体反応の中での酸化ストレスに対する防御機構、とくに術中生体内チオール基の酸化還元に影響する蛋白質の変化を追跡している。

生体の酸化障害防御研究

Glutaredoxin、Thioredoxin system は、生体内で活性チオール基を持つ蛋白質の酸化還元を司る事で、生体機能の調節作用を持っている。両 system の活性酸素の消去作用、障害酵素の再生化作用など良く知られている。特に手術中の患者は活性酸素の生成など酸化機構が活性化され、生体の恒常性が障害される。我々は、周術期の生体内チオール化合物、Glutaredoxin、Thioredoxin system の質、量の変動を、麻酔薬、合併症の影響等を通して見ている。現在も、血清中なチオール化合物、静脈麻酔薬である propofol の効果を含めて追跡している。

附属病院慢性疾患診療部 (リハビリテーション) Rehabilitation of Chronic Diseases

人事異動については、小柳雅孔助手がフランクフルト大学 Stefanie Dimmeler 教授のもとに留学した。代わりに尾山純一助手が着任した。現在当部の職員は、部長西村純二教授、尾山純一助手、慢性疾患診療部主任西山保弘、理学療法士工藤義弘、矢守とも子 (旧姓和田)、作業療法士山元裕子、マッサージ師岡田玉樹、作業員佐藤恵美子の8名からなる。

当部の最近の診療実績について述べる。一昨年9月より作業療法IIの施設認定を受けて作業療法士山元裕子による作業療法のサービスを開始した。その成果もあり平成10年度に立てられた中間目標11000件の年間利用患者数を既に達成した。平成8年度7450件、平成9年7785件、平成10年8753件、平成11年度9081件、平成12年10518件、平成13年度理学療法9430件、作業療法1270件、合計10700件、平成14年度理学療法10059件、作業療法2243件、合計12302件となり研究に併せて診療実績も向上した。今後は対象疾患を拡大し診療内容の充実を図ることである。

この一年の研究活動は、西山保弘が関節リウマチの炎症関節に対する徒手的アプローチの講演、またヒトの軟部組織に対する圧刺激がもたらす生理的変化の研究を始めた。山元裕子は、作業療法開設までのプロセスを記録しその考察案を作業療法学会にエントリーした。

その他として工藤義弘と西山保弘は、大分県で理学療法士として初めてのLCDE (大分県糖尿病療養指導士)の資格を取得した。また、大分リウマチケア研究会の事務局として、その第3回研究会を共催した。

業績目録

原著論文

1. 西山保弘 2002年
痛みの理学療法-痛みはどこまで取れるか-
大分リウマチケア研究会誌 vol.3, 14-19. 2002
2. 西山保弘
RAのための痛覚系末梢受容器刺激法 (下肢編)
日本RAのリハビリ研究会誌, No.17,15-21,2002

学会発表

1. 西山保弘 2002年7/4-7/7
痛覚系末梢受容器刺激法の紹介-新しい理論と刺激法の紹介-
第37回日本理学療法学会大会, 静岡
2. 西山保弘 2002年9/7
痛みの理学療法-痛みはどこまで取れるか-

第3回大分リウマチケア研究会，大分

講演

1. 西山保弘

RAのための痛覚系末梢受容器刺激法（下肢編）

第17回日本RAのリハビリ研究会，福井